

青函みらい会議 発言要旨①



奥平 理 准教授
(北海道教育大学函館校)

専門は観光学と地理学。本会議では、観光学の観点からSDGsと北海道・北東北の縄文遺跡群が世界遺産に決まった後の動きについてお話いただきました。

- SDGsのシンボリックな場所として遺跡に観光客を呼び込むならば、「縄文時代が1万年以上続いた」ことをアピールすることが大事。
- 観光を考えた場合、一つ一つの遺跡が離れた場所にあるので、それをどう街に近づけるかが課題。
- SDGsの観点では大勢の団体客はあまり望ましくないため、個人客を前提として、遺跡と街をつなぐシステムを構築するのがベストとなる。
- 日本やアジア圏とは違った欧米圏へアピールしていくことが重要。青函地域はあまり欧米からの観光客が来ていないので、そこへどうプロモートしていくか、大勢の方が来た場合の対応も次の課題。

- 縄文文化は、狩猟・漁労・採集による定住生活社会で、1万年以上にもわたって同じ状況が持続可能であったという点において、世界的にも稀有な文化。SDGsの17の目標の中にもいくつか縄文文化で語れるものがある。
- 縄文人は、資源管理という面で非常に長けていた。森や海が豊かで、生物多様な自然資源を、年間を通して管理をしながら持続可能な社会を実現していたことが、遺跡の調査研究から判明している。
- 縄文人が持つ「もったいない」や「ものを大切に使う」という観念を我々がとる行動に生かすとともに、いかに現代的な合理的な暮らしを実現していくかが大切である。



福田 裕二 主査
(函館市教育委員会文化財課兼世界遺産登録推進室)

文化財保護、特に遺跡の発掘調査や史跡の保存などに関わってきた経験から、縄文文化の特徴、縄文文化とSDGsの関係をお話いただきました。

青函みらい会議 発言要旨②



榊引 素夫 教授
(青森大学社会学部)

新幹線の研究を通して青函地域を見てきた経験から、青函地域の持続的な発展についてお話いただきました。

また、大学のSDGs研究センターと、青森県防災理事会の理事としてSDGsに取り組んでおられます。

- 縄文土器の変化には「これが成長か進化か！」と思う部分があり、「成長と進化」を読み替えてみると、コロナも我々に、「成熟」や「深化」を求めているのではと思う。
- どのように人口減の中で社会を再デザインするのか。新幹線には「安心の装置」という機能がある。この中で、例えば首都圏に固定された呪縛からどう解放放たれるかを考えると活路が開けてくると思う。
- 地域同士が繋がることで、互いに学びながら新しい地域づくりを目指す。このような眼差しが非常に重要だと考える。
- 「遺跡が散在しているのでアクセスが大変だ」という点では、VRなどのITを活用する取組みがある。まだまだできることはあるので、何をやるかしっかり考えていくことが大切。

- 皆が各遺跡に対して誇りを持ち大事にしていることが世界遺産登録に結び着いた。遺跡に対しての誇り、思いを持った取組みをイコモスにわかってもらうことが、とても大事な活動であった。
- 青森・函館両会議所では、平成25年から両地域の企業を結び、商品開発や技術提携を行う「青函パートナーシップ連携事業」を行っている。これまで382社が参加し、それぞれの得意分野、特産品が上手くコラボした青函連携商品が15品生まれている。
- 世界遺産登録を契機に、遺跡を訪れる沢山の人に向けて、街の特性を活かし、食事処や宿泊施設も上手に網羅した様々な旅行商品を開発できれば良いと思う。17遺跡の連携を活かし、訪れた方に対し、より良いサービスを作り出すことも必要。



若井 敬一郎 会頭
(青森商工会議所)

青森商工会議所 青年部会長の時に、ボランティアガイドやガイドブック作りを経験。ボランティア組織「三内丸山応援隊」などで世界遺産登録に関わってこられた経験や、青函地域のビジネスの展望についてお話いただきました。